東原本 八幡大菩薩御縁起（上巻）

―影印、翻刻―

黒田彰
坪井直子
筒井大祐

略解題

昨年八月、本誌前号（16号）の表紙を飾る写真撮影を兼ねて、八幡縁起に登場する塵輪伝説を調査すべく、岡山県の牛窓町に赴いた際、牛窓の名家である東原家（中崎屋）に、一本の八幡縁起絵巻が伝えられていることを知った（以下、東原本と呼ぶ）。東原本の八幡縁起絵巻は、これまで紹介されたことのない新出資料で、かつて刈屋栄昌氏が労作『牛窓風土物語』（日本文教出版、昭和48年、復刻昭和63年）15頁上に、牛鬼出現の場面一葉の写真を載せられたことがある。本書は、上下二巻の内の上巻のみのものながら、八幡縁起絵巻の在地の極めて重要な資料と思しく、ここに東原家の当主和郎氏の許可を得て影印、翻刻することとした。

東原本は、紙本着色の絵巻一巻、表紙は縦三一・二糎、横二〇・一糎で、内題に「八幡大菩薩御縁起」とあり（外題無）、詞書六紙（漢字平仮名交じり）、絵六図から成る、全長八七九・五糎の江戸前期の写しに掛る巻子本である。

さて、八幡縁起絵巻は、鎌倉時代写の伝本を存する、古く且つ、著名な中世縁起絵巻の一つだが、例えば宮次男氏はかつて、その諸本を大きく、

甲類（「八幡大菩薩御縁起」）

乙類（「八幡宮縁起」）

二系統に分類し（中間に位置するものもある）、それら二系統の先後については、「甲類本が先行し、それにもとづいて乙類本が再編成されたと推定できる」と述べて、乙類本成立に際し、八幡愚童訓（甲本）の関与のあったことなどを指摘されており（「八幡大菩薩御縁起と八幡宮縁起」上中下、『美術研究』333、335、336、昭和60年9月、61年3、8月）、それらのことは今日においてもなお動かない（八幡縁起絵巻の分類に関してはまた、松本隆信氏によるA、B分類等もある〈「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」、『御伽草子の世界』所収、三省堂、昭和57年〉）。そして、東原本は、一見して甲類本に属することが明らかである。

ところで、八幡縁起の甲類本については、宮氏が「最も古い遺品」とされた（前掲論文上）、サンフランシスコ・アジア美術館本（康応元〈一三八九〉年写）に対し、例えば天理図書館本（享禄四〈一五三一〉年写）よりも「近い」とし、また、同系統の承応二（一六五三）年版本の「写しではない」とされる、中京大学図書館本がその後紹介されたが（長谷川端、角田美穂氏「『八幡大菩薩御縁起』解題・翻刻」、『中京大学図書館学紀要』19、平成10年3月）、興味深いことに、東原本は絵、詞書とも中京大学図書館本に極めて近い。但し、直接関係はないだろう。とこ

ろで、八幡縁起絵巻の甲類に関しては、驚くべきことに最近、従来最古とされたサンフランシスコ・アジア美術館本（一三八九）を、さらに七十年近く遡る、出光美術館本（二巻、元亨二〈一三二二〉年写）が出現した。八幡縁起絵巻の研究は、その成立から流布本の刊行に到る、全射程を検討する時期に入ったものと見られ、今後東原本を始めとする諸資料が、その階梯を提供することになろう。

ここで、牛窓の東原家のことを、簡単に紹介しておく。東原家は、八幡縁起における神功皇后三韓征伐の伝説の故地、牛窓の旧家で、『牛窓風土物語』の「朝鮮出兵と牛窓水軍」に、

文禄元年四月、豊臣秀吉は朝鮮出兵の途、牛窓に着船して、年寄東原弥右衛門を召し出し、水軍や軍船の徴発に対して協力を求めた。弥右衛門はこれを快諾すると共に、酒肴を差し出して秀吉の前途を祝福した。（東原家系図）そして同月征討軍の総帥宇喜多秀家も、牛窓に止宿して、予て牛窓で手配せる水主・軍船を率いて出陣したが、この時牛窓で徴発された水主や軍船の数は詳かではない。東原弥右衛門の手記にも、

備前中納言殿朝鮮国へ御出陣の時、御召船に乗り御供仕参申候。（吉備温故）

とあるのみで、詳細は記されていないが、相当数の浦船廻船が徴発され、多くの水主傭兵が秀家の配下として参加したものの如くである

と、弥右衛門の事跡が記されている。この弥右衛門や治郎大夫など、東原一族は庄屋名主として「江戸初期に到るまで牛窓の商人たちの中でリーダー的な存在だった」が、「一七世紀半ば頃になって商家の勢力交替がなされ」、新興の那須一族（奈良屋）に取って代わられたようである（『牛窓町史』資料編Ⅰ、牛窓町、平成8年。また、通史編、近世三章二参照）。東原家にはまた、「朝鮮場由来」（文禄四〈一五九五〉年東原弥右衛門尉景久書）なる文書が伝わり、唐土の貴女が牛窓に漂着して亡くなり、朝鮮場大明神（本町浅場家屋敷内）として祀られた経緯を内容とするもので、塵輪伝説に付随する、戦死した新羅王子唐琴を日本まで追い掛けて来て、牛窓で亡くなり瑠璃姫宮（朝鮮様）と斎われた、瑠璃姫伝説の元となった可能性がある（『牛窓風土物語』「朝鮮場大明神の由来」）。東原本がこのような伝承に富んだ牛窓の旧家に伝わることは、中世縁起絵巻の生成の場を考える上で、是非とも留意されてよいことである。

翻刻に際しては、次の方針に従った。改行及び、表記は原本通りとし、句読点は施さない。用字は通行の字体に改める。本文中に絵の入る位置を、（図一―）の形で示した。

東原本八幡大菩薩御縁起（上巻）翻刻

八幡大菩薩御縁起

それ我朝あきつしまとよあしはらなかつくにゝ
むかし天神七代地神五代以上十二代はみな神
のみよなりかの地神第五の神彦波瀲武鸕鷀
草葺不合のみことの第四の御子神武天皇と
申奉るは人王代はしめ也帝よりこのかた人王
十六代の御する応神天皇と申は今の八幡大
菩薩の御事也御ちゝ仲哀天皇の御宇二年
癸酉　しんらこくよりいてきのくんひやうきおひきた
つて本朝をうちとらんとす天皇きちよくし
てのたまはく皇后のみやくわいにんの王子もし
男子ならはりうわうのむこになすへしもし
女子たらは竜王のきさきになすへしと云々然る
に仲哀天皇九年庚寅戊寅二月六日つくしかしゐの
宮にをひて程なくほうきよおはんぬそのゝち神
功皇后しんらはくさいかうらいをうちしたかへん
かためにに鎮西へおもむき給し時らせいもんを
いてさせ給とてきせいせられけるはねかはくは
天道我にちからをそへて彼いこくのてきを
ほろほしてわかくにをあんおんならしめ給へと
申給しかはいつくよりともなくはくはつのらう
おうひとりきたれり皇后とふてのたまはくいかな
る老人なるらんと老人こたへていはく君しんら
はくさいとうをうちしたかへんとおほしめしたゝ
せ給おきなも御とも申て御ちからにも成奉らん
とてまいりて候なりと申時皇后御心のうち
におほしめしけるやうかの老人のていさしもわか
ちからになるへしともおほえすおほしめしなか
らもし又へんけの物にてもやあるらんとて
めしくしてちんせいへくたらせ給ふ

図一

ひせんのとまりにつかせ給し時たけ十丈はかり
なるうしきたつてかの皇后ののらせたまひたる御
ふねをそんせんとする時此おきなかのうしのつのを
とつてうみのなかへなけいれぬよつて此とまりを
はうしまろはしとかきてうしまとと申なり
しかるにこのうしその海のなかにして島となりて
いまにはへりそれよりして皇后この老人まこと

にたのもしきものとおほしめしてちかくめしよせて何事もいさいおほせ合られけり

図二

そのゝちもしのせきよりかみにおうくはかさきと申とまりにつかせ給しときしほこと〳〵くひあかりてふねかよふへきにあらすそのとき此翁かのふねともをただひとりしておきなかへみなをしいたしけり此とき皇后いよ〳〵たのもしきことにおほしめしけりなかとの国ふなき山の木をきりてうさのこほりにてふね四十八そうつくりてすなはちかしまにてのりふねのくん兵一千三百七十五人也大しやうくんにはすみよしならひにかうらの大しん也かんとりはかしまの大明神也ときに皇后いこくへわたり給ふほとにあしやのつにつかせ給ふときかのとまりにて弓やをとりいたしておきなのい侍りけるを御らんしけれはゆくゑもなきいはのさき十丈斗さし出たるを引とりていたりけれはものにてなくいとをしてけり皇后これを御覧していよ〳〵御心まさりにおほしめしけり

図三

其のちかすいのはまと申所につきたまふ皇后老人におほせらるゝやうしんらはくさい国へわたりつきてもかのてきともをは何とかしてうちしたかふへしともおほえすとおほせけるとき老人申やうこれよりにしにしかのはまと申所か候かのしまにあんとんのいそらと申ものありくたんのわらはをめしてりうくうしやうにつかはしてかんしゆまんしゆと申ふたつのたまをかりたまへ此ふたつのたまたにも候はゝかのくにをうちしたかへましまさん事いとやすき事に候と申そのとき皇后おほせけるはくたんのわらはをは何としてかめすへきそと仰けるとき老人申さく此わらはせいなうと申まひをことに愛しはへるなりこのまひをは又はならまひとも申也その時かの舞をはたれ人のまふへきやとおほせありけれは海中にふたいをかまへてこの老人かのまひを舞すましけりそのふたいいしとなりて海の中に今に侍り

図四

そのときあんとんのいそら此まひをあいせんとて
ふねにのりてふたいちかくきたれり皇后老人
におほせけるはくたんのたまの事かのわらはに申
へきよし仰られけれは老人わらはに申ていはく
なんちしらすや日本国王御ほんいをとけんかた
めにしんらはくさいへわたらせ給ふ日本のうち
にゐなからこくわうのおほせをはいかてかそむき
奉るへきはやく御ちからとなりてしよこく
のもの共を打したかへてまいらせよと申給ひ
けれは此わらはせんしをはそむき奉るへからす
と申てすなはちりうわうに珠をかりてまいらせ
むとてかへりてつきの日のあした皇后の御前に
もちて参りけりそのとき皇后御よろこひは
限なし

図五

その時皇后しはらくつしまのくにゝたちより給
かの所にしろきかたあるいしあり皇后大菩薩
をくわいにんし奉り給ひしに此いしに御はら
をひやしてもし腹のうちのたいし日本のある
しとなるへくはいま一月むまるへからすとこし
らへ給ひき御きもんには此いしをわかたいと
思ふへしと云々御はらの中にまします皇子
におほせられけるはわれいこくをうちしたかへん
かためにこれまてわたれりなんちかならすきてう
の後生れ給へとてものすそにいしをつつみて
御こしにはさませ給てありしはこのいしの事也
此ゆへに御たんしやうなかりき皇后たちまち
におとこのすかたとなり給てはくさいこくへわ
たりたまひけりみかたのふね四十八そうのりふね
のくんひやう一千三百七十五人也いこくのひやうせん
十万八千そうくんひやう四十九万六十よ人也かの
くにのこくわう大しんとうてうらうしていはく日
本はかしこき国也何てう女人を大しやうくんとす
るやすなはちかのくにのくんひやうとも雲霞のこと
くせめきたつて皇后の御かたを打とり奉らん
とすそのときかんしゆの玉を海の中に入給ひしか
は大うみたちまちにひあかりてへい〳〵として
ろくちのことくかはきにけりかの国の者こと〳〵く
よろこひて皇后のみやをうち奉らんとてしほ
ひにつきておきのかたへおひかゝりし時干珠を

はとりあけて満珠の玉をくたし給ひしかは
波ほうらいのことくたちて大かいもとのことくみち
しかは異国のおんてきともみなこと〳〵くしほ
みつにたゝよひてひとりものこらす死うせぬ
あるゑんきにはくひせんのくにさかのこほりに
ましますかはかみのみやにかのふたつの珠はお
さまるたけ五すんはかりかしらは二寸斗也おは
ほそき珠也よつて皇后ほんいのことくいてきの
くんひやうをうちほろほし給てかのくにをした
かへておほせけるはわれたこくにしてすてにいく
はくの人をころしつさためてせつしやうの名をあ
けん事よしなしと御なけき有しかはふたつの
竜王海の中よりいてゝ死人ひとりものこさす
くいうしなひぬせつしやうをなけきおほしめすゆ
へにはうしやうゑをおこなひ給ふ今のはうしやう
ゑはいこくのしにんのけうやうのため也

図六

付記　本書の影印、翻刻を御許可下さった、東原和郎氏に対し、心から御礼申し上げたい。小稿は、平成22年度科学研究費補助金基盤研究(B)による成果の一部である。